ぎふ どうぼう

No. 93

2007. 4

教育の現場から学ぶ
「いのちの大切さ―自分探し―」

延塚知道 対談 若園里子

1948年福岡県生まれ
大谷大学文学部真宗学科卒業、同大学大学院博士課程満期退学。
1999年より大谷大学教授、現在に至る。　専門は真宗学。　日豊教区昭光寺住職。

岐阜清翔高等学校教師。担当は数学。
今どきの子をあっという間に自分の手の平に載せてしまうワザは凄い。近年は、沖縄にはまり、全国でも珍しく高校で「沖縄文化研究会」という部活を立ち上げ、年に数回はオキナワ詣でを重ねている。

中高生の自殺のニュースが新聞やテレビを賑わします。学生のイメージも無気力、自己中などしか連想されにくくなってきています。童話作家の新美南吉は、「また　今日も　己を探す」と生涯をかけて自己探求をされましたが、今は、多くの若者が「自分探し」を社会からの逃避の手段にしています。『現代の若者は、何に悩み何を求めているのか。真宗の教えは必要なのか。』を含め、学生から絶大な人気のある大谷大学教授(真宗学)延塚知道先生と、清翔高校教諭若園里子先生の対談を通して、学んでいきたいと思います。

一番好きなもの

関本理恵（18才）

私は高速道路が好きです
私はスモッグで汚れた風が好きです
私は魚の死んでいる海が好きです
私はごみでいっぱいの町が好きです
殺人、詐欺、自動車事故が好き
そして　何より好きなのは
多数の人が
涙を流す
血を流す
戦争が大好きです
飢えと
寒さの中で
戦って死んでいく姿を見ると
背中がぞくぞくするほど
楽しくなります

毎日毎日
大人が
子供が
生まれたばかりの赤ん坊が
次から次へと
死んでいるかと思うと
心がゆったりします
歴史を歴史と感じ過去を過去として思う
無感情な
時の流れに、自分自身に
たまらなく喜びを感じます
こんな私を助けて下さい
誰か助けて下さい
たった一粒でもいいのです
こんな私に
涙というものを与えてください
たった一瞬でいいのです
こんな私に
尊さというものを与えてください
私の名前は
人間といいます

『詩』真宗大谷派児童教化連盟発行『ねがいぃ』より／『写真』2006年度8月岐阜教区中高生研修会

編集後記

「一番好きなもの」と聞かれたら、とりあえず「楽」と答えます。

でも、正直に言うと、「楽」するために今日まで動いてきたわけでもありません。だって結構、つまらないことに首を突っ込んだり、無駄な努力を重ねたり。

本当のところ、「快感」っていうか、「生きてるって実感する時間」を持つことが、自分が真に求めてることなんだって最近は知っています。

ただ、知っていようが知らずにいようが、その在り方の全体を「自分探し」というように聞きました。でも、その在り方は自我を中心に拡大していく在り方だと厳しく指摘された気がします。

「人間そのものが問われないと解けない問題にもかかわらず、人間をわかったことにして、全部外側に眼を向けようとするわけです。(4頁)

「私の名前は　人間といいます」

若い彼女がこの言葉をどうして最後に言わなければならなかったのか。この言葉がなくてもこの詩は終われるのに。

大人のずるさや勝手さを問うのではなく、その眼は自分自身を悲痛にも切り刻み、彼女は人間の全体をその体に担おうとまでするのです。

そんなにまで苦しい思いを、どうして一人でかかえてしまったんだろう。

法蔵菩薩、それは人間の歴史と社会を一人で担おうと立つ人。

それを決して一人だけで担わせないと、この夏も大人と子どもたちが出会う集いが開かれます。児連夏の集い、そして中高生研修会に集ってくれる人を広く募集しています。

（ぎふどうぼう編集委員長　岩越　智俊）

発　行　岐阜教区教化委員会
真宗大谷派岐阜教務所
鈴木宏雄
〒500-8054
岐阜市大門町1
Tel.(058)266・1378
編　集　岐阜同朋編集委員会

「現代と真宗」

若園 里子 対談 延塚 知道

自分らしさ　自分探し

若園

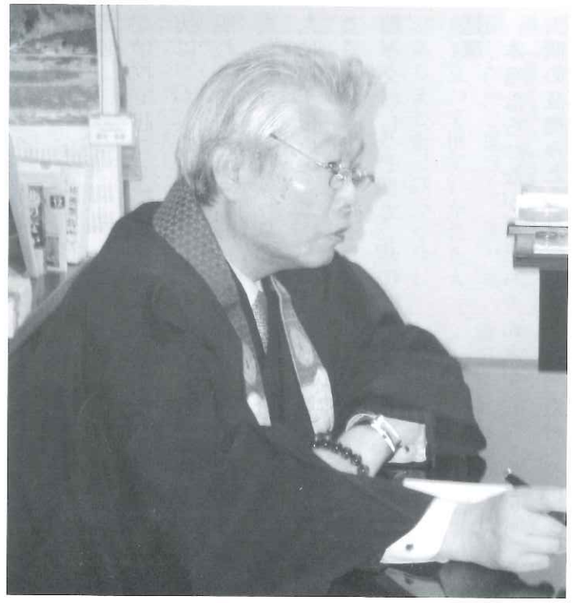
今の現場（高校）の子どもたちというのは、つながりを作るのが大変下手。自分の居場所を確保するために、悪ぶって見せたりつっぱったり、時に共通の相手を排除していくところで、「仲間なんだ」みたいな形を取っているケースが多いんです。自分が排除されないようにするために、何か共通の話題を見つけようとするところがあって。結果を求める社会の繁栄の影響が、子ども社会の中でも出てきているのかもしれません。

仲間と本音で語り合いながら共に協力して関係を作る。それは、子ども同士の関係だけじゃなくて親子の関係でも難しくなってきているようですね。親と話をする時にメールで会話をすることもあるんですよね。それに、朝ご飯を家で食べてこない子が多い。家庭で共通の場を持つことって随分減ってきているんじゃないでしょうか？グローバルな社会となり、大人も余裕がないんですよね。

人間関係も都合がいい時は「友だちだから」と言うけれど、何かトラブルや問題があって自分が傷つくと感じると、直ぐにアドレスを変えるんです。すごいスピードで。そして関係を断ち切り、また、自分を受け入れてくれる相手を探していく。それって、人間として成長していくチャンスを失っていっていることになるんですよね。ぶつかったことをこえて行くから、たがいのことが理解できて大人に近づいていく、そして、他人を思いやる気持ちだとか、社会を生きていくための力っていうのを身につけていくと思うんですよね。

延塚

そうそう。子どものまま大きくなっているような話であって、わがまま放題で、結局、まわりに人がいない、人がいても人と思ってない。「自分探し」っていう言葉が、最近はやっているでしょ。そういう状況の中で生きていて、不安で本当の自分ではないような気がする。充実感もないし空しいし、何かどうも違う。本当の自分じゃないような気がするから自分を探してみたい。こういうのかなあ。



若園

自分らしさっていうのは、ありのままでいられることのようにすごく感じるんですけど。今の社会は、特別な何かが自分にないといけないんだみたいなことを感じさせる雰囲気がある。個性を大切にして、ありのままでって言いながら、目立つと攻撃の対象になるから、あまり目立ったことしないでよっていうことになるんじゃないかなあ。

何だか、生活の水準も上がり、個人にもさらに高度なものを要求されるような気がして。教育の選択肢とかも充実してきているように思われますが、その割に子どもたちは、あんまり生き生きしてないんですよ。

生きるってどういうこと

若園

最近、子どもたちが家族、学校以外の大人と出会う機会が少ないじゃないですか。ロマンを語ってくれる大人と出会う機会がないっていうのはすごく残念に感じるんですね。そして、父も母も、日々仕事に疲れ、大変だっていう言葉を口にすることが多い。大人になったら大変なんだったら「このまま子どもでいたい」って言葉が出ちゃう。

延塚

そういう意味では、大人も子どもも一緒なのだけど、人生に対する夢とか理想とか、そういうものを誰も持ち合わせていないということはあるんじゃないかなあ。教育効果を上げるためにいろんな方策とか施策をやっているけれども、問題はそういうところにあるのではなくて、本当は一人一人の生きる意欲とか理想とか、何かそういうような生きることに直接関わってくるようなレベルの問題なんじゃないかなあ。

いつかロシアの家庭の団欒のニュースを見てびっくりしたんだけど、貧しい食事を囲んで話をしているその内容が、愛とか、人生とか、日本の家庭ではとてもじゃないけど出てくるようなテーマではなかったわけです。そんな話を一生懸命、子どもと両親がしてたのですよ。日本の方がよほどおかしいのだと思います。効率性とか生産性とか結果よりも原因の方がもっと大切なのです。生きるということを尋ねるときには、何をしたいかとか、どうしたいかという意欲に関わる問題なのだと思います。

つながりを生きる

若園

学校で起こっている問題は、必ず社会で起こってる現実ばっかりなんですよね。いじめにしたって、仲間作りに関わる問題だって、井戸端会議している地域の人と何ら変わりない。昔ならなおのこと、日本は農耕民族で地域の人にお手伝いをしてもらって農業をして、一緒に作業することによって、汗をかき、語り、そのあと食事をし、酒を酌み交わし、そして、共に助け合い生きてきた。

延塚

本当ならつながりをちゃんと生きれるということが、人間の証拠みたいなものでしょう。だけど今はおっしゃるように、スイッチ切れば自分で勝手に自分の世界に入れるわけだから。関係性というものは昔ほど強くなくても生きていける、そういう状況になってきてますよね。時代ですからそれは個人の能力を最終的には金にする。だから個人のつながりが全部切れてきて、人間の一番大きな問題が顕在化してきたのでしょう。だからできるだけ苦労をしないかわりに、少しも達成感もないし生き甲斐にもならない。そういう風につながりがきれているというところに、人間の一番の問題があるというふうに思います。

宗教、そして仏教

若園

でも人ってやっぱり弱いから、そういったときに最後どういうものにすがるかっていうと、宗教や精神世界などって多いじゃないですか。占いだったり、細木数子さんや江原啓之さんの番組はものすごく人気があり、みんながそういうものに頼ったり興味を持ち、そうするわけですよ。眼に見えない、そういった世界っていうものに自分をまかせる。一方、人の生死に直面する機会や、お墓や仏壇に手を合わせるなんてことも少なくなって、生きていくということに対して、何か「ああっ」っていう、そんな感覚ってどんどん減っていってると思うんですよ。

延塚

宗教を持たないというのは、自分を見つめる鏡を持たないのと一緒です。だから、完全に自分を野放しに拡大していくわけです。自意識や欲望なんかも野放しに拡大していって、それを反省する契機をまったく持たなくなってる。自分を映す鏡というのが正しい宗教が持ってる役目だと思われます。

例えば、自殺も戦争も他の動物では絶対しません。外側だけを調整しても、自殺も戦争もなくならないわけです。これは、人間の、人間しか持っていない特徴なのでしょう。人間そのものが問われないと解けない問題にもかかわらず、人間をわかったことにして、全部外側に眼を向けようとするわけです。だから、方策を立てたり施策を立てたり、効率が上がるような形でいろんなことやるけれども、一向に解決しない。それは実は人間の方に問題がある。けれど、その人間を問う眼を持たない。それが「近代」という時代の決定的な問題なのだと思います。

自分を不問にしておいて外側に向く方向ではなくて、自分を内に問うていくような方向の道が、もっと正しくきちっと了解されないと、私は近代が持ってる問題は解けないと思います。その辺が「仏教の内観道」が持っている、大事な方向だと思います。

風をかんじて

まず自らが最もよく教化される

昨年の年の瀬に、あるところでお話をさせていただくご縁をいただきました。その日の午後、突然あくびとも何とも言えない大きな声（音といったほうが適切）がしたかと思うと、さっと席を立って出ていかれた人がありました。びっくりしましたが、それ以上に腹立たしさを覚えたのが正直なところです。外見では、何とか平静を保っていましたが。：（あくまで自分では、そのつもりに過ぎない？）

この腹立たしさは、しばらく消えることはありませんでした。：そんなとき、『教法の宣布」とはどういうことかと言いますと、広めるのではなく、広まるのです。最もよく如来によって教化された人をとおして、多くの人が同じく教化されていくんです。まず自らが最もよく教化される、その時にその教化された人の姿を見て、人々がまた同じように生きたいということになるんでしょう。真の教化者は常に如来であります』という、和田稠先生のことばを思い出しハッとさせられました。

このことは、「そのとおりだろうな、とても教化することなどできない」と、頭では理解していました。しかし、：：自分でも知らぬうちに、「教化されるもの」が「教化するもの」になってしまっていたのです。自分のそんな傲慢な心を棚に上げ、席を立つとは何事かと相手の方ばかりを責めていたのでした。その相手の方は、私のそういった傲慢さを気づかせる大切な仕事をされていたのでした。

「仏法は聞き破る、聞き抜く道ですね。自力の夢が破られるところに感ぜられていく法界でした」との、池田勇諦先生のご教示を憶念しつづけていかなければならないと強く思う今日この頃です。

第十組　通性寺　高木 亮道

発足した「同朋の会」

「以前常飯に参ったらお内仏の花が横向きに立ててあったんです。次の時も：。不思議に思って聞いたら『テレビで、仏様に供えるのだから花の裏側を仏様の方に見せるものでないといっていたけれど、そうすると参っている私たちが裏を見て参ることになるから、横向きならいいと思って』と真面目な顔で言われたんです。」

「そういえば、家のお内仏の花の向きも横に向けてあったわ。お義母さんはあの番組のファンやから：」

「親鸞聖人は歎異抄の中で、親の孝養の為に念仏をしたことはない、と言ってみえるけどどういうことなんやろう。わたしらは供養するんやと思うのやけど。」

毎月二十八日の夜に、お勤めの練習の後住職が少し話をし、その後は恥ずかしがらずに何でもワイワイガヤガヤ仏様の話をしようと集まる「萌の会」での話です。この同朋の会は昨年から始まりました。発起人は、一昨年十三組の推進員養成講座に参加してくださった方たちです。

「推進員の五回の前期講習の話は難しくて解りにくかったけれど、二泊三日の真宗本廟の後期講習に参加し、今までにない感動をおぼえた。その思いを一人でも多くの人に感じてもらう機会をもってもらえたら」と言われ、その願いから計画してくれました。

自坊のある地域は、以前はほとんどが真宗門徒の方で、毎月のお講、法話会、お敬い等聞法の盛んな地域ではありますが、この何年かのうちに様変わりしてきました。

郡上にもここ何年かで入ってきた生活様式の変化が、また一人一人の宗教に対する思いの変革が、昔ながらの聞法方法が保てなくなったのが実情です。でもまだかろうじて残っている法への思いの火種をどうかして少しでも大きい火として後に継(つ)いでいけないものかと思っていました。推進員養成講座を組で受ける話が出た時、住職とこの機会をチャンスにできないかと話し合い、あえて社会の中心で現に活躍している多忙な方々に推進員になって戴くようお願いしていきました。それが私たちが願った以上に積極的に受けとめてくださり、今回の会の発足となり嬉しく思っています。

まだまだ小さな火ですが、少しずつ裾野がひろがっていけばと願っています。

第十三組　円徳寺　佐々木郁子

ぶつじズームイン 袈裟と略肩衣

僧侶の袈裟には、どんないわれがあるの？

インドでは、出家者が保持するものは三衣一鉢（さんねいっぱち）といって、僧服と食器だけでした。当然、衣食住のうち、住に関するものは必要なく、必要以上の物の保持は許されなかったのです。

袈裟は梵語でカシャーヤといって、混濁色という意味です。当時、白い布を纏（まと）っていた在家者と区別できるように、草木や金属の錆で黄土色や青黒色など濁った色に衣を染め直し、出家者の印としたといわれています。

ところで、三衣とはなんですか？

福田衣（ふくでんね）（田の畦のように継ぎ合わせた衣）、糞掃衣（ふんぞうえ）（捨てたられた布を集めて作った衣）という別名があるように、袈裟は必ず布を継ぎ合わせて作られます。

三衣とは、

①僧伽梨（そうぎゃり）＝王宮に招かれたとき等の正装着
②鬱多羅僧（うったらそう）＝礼拝や聴講に用いた普通着
③安陀会（あんだえ）＝作務や臥床に用いる下着

のことで、元来この僧服の三衣を総称して「袈裟」と呼んだのです。

それぞれ縦に布地が何列あるかで、

①僧伽梨は九条以上
②鬱多羅僧は七条
③安陀会は五条

に分かれた長方形の布地というのが伝統です。

真宗大谷派においても現在、五条袈裟、七条袈裟等が用いられています。

じゃあ、袈裟の下に衣を着ているのはなぜ？

仏教が北伝するにあたって、三衣では寒さがしのげず、中に下衣を着用するようになりました。これが法衣の始まりです。法衣の着用が普通になると、袈裟がだんだん象徴的なものになり、セイロンやミャンマーなど黄色い布をまきつけただけの南伝仏教と大きく違ってきてしまいました。

トルファンにあるベゼクリック寺院の壁画です。向かって右がインド僧、左が中国僧で、下衣を着ています。

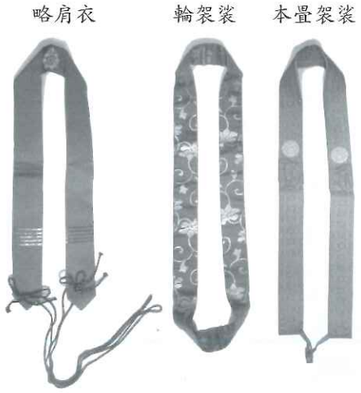
袈裟（本畳袈裟・輪袈裟）と、ご門徒のもちいる略肩衣ってどう違うの？

本畳袈裟は五条袈裟を折畳んで、首からかけられるように工夫した、江戸中期以来の発明品です。中にはうすい生地が折り込まれていて、広げるとそのまま五条袈裟になります。

輪袈裟は真宗以外でも天台宗、真言宗などで使われています。いずれも外出時の道中用で、法事などで正式に袈裟として使われることはありません。

さて略肩衣ですが、そもそも肩衣とは裃（かみしも）の上衣のことをいいます。小袖の上に羽織り、同じ布の袴をはくことで和服における男子の正装とされていました。時代劇で武士が着ている肩の張った衣がそれです。「仏前に参るのに正装に近い簡略な服装を」ということで生まれたものが略肩衣といえそうです。

というわけで、輪袈裟と略肩衣、同じような形をしていてもそのルーツは全く別なんですね。



そのいわれを紐解けば、僧侶の袈裟にインド以来二千五百年の歴史が、ご門徒の方の服装にも江戸時代以来の歴史があります。現代というレンズだけでは、その見た目しか見えないということがよく分かりました。袈裟を、略肩衣を、それぞれ着用するには心してかからないといけないようですね。